

王陽明佛刹巡歷年譜會要〔三〕

久須本文雄

四十九歲 正德十有五年庚辰、皇紀二二八〇、西紀一五

二〇

赴南京正月上旬？ 武宗帝南京にあり、陽明、南昌より水路に由り召に赴く。

留蕪湖正月中旬？ 途次宦官忠泰等阻止せしため、安徽の蕪湖に半月餘留置。

遊九華山下正月中旬？ 後己むを得ず二十有年前曾遊の幽境、九華山の草庵に逃れ専ら端座澄心見性の踐履をなし、其の間、無相、化城諸禪刹に遊ぶ。

九華に赴く途次江上九華山を觀望し詩を賦して曰く。

江上望九華山二首

王陽明佛刹巡歷年譜會要〔三〕

當年一上化城峯、十日高眠雷雨
中、霽色曉開千嶂雪、濤聲夜渡九江風、
此時隔水看圖畫、幾年綠雲住桂叢、
却負洞仙蓬海約、玉函丹訣在崆峒。
窮探雖得盡幽奇、山勢須從遠望知、
幾朵芙蓉開碧落、九天屏嶂列旌麾、
高同華嶽應無忝、名並匡廬却稍卑、
信是謫仙還具眼、九華題後竟難移。
〔全書卷二十、外集二、江西詩內〕

觀九華龍潭

飛流三百丈、頃洞祕靈湫、峽坼開雷
斧、天虛下月鉤、化形時試鉢、吐氣
或成樓、吾欲鞭龍起、爲霖遍九州。

〔一〕

(全書卷二十、外集二、江西詩內)

重遊無相寺次舊韻

舊識仙源路未差，也從谷口問桃花。
屢攀絕棧經殘雪，幾度清溪踏月華。
虎穴相隣多異境，鳥飛不到有僧家。
頻來休下仙翁榻，只借峯頭一方霞。

(全書卷二十、外集二、江西詩內)

無相寺金沙泉次韻

黃金不布地，傾沙瀉流泉。潭淨長開鏡，池分或鑄蓮。興雲爲大雨，濟世作豐年。縱有貪夫過，清風自灑然。

(全書卷二十、外集二、江西詩內)

重遊化城寺二首

愛山日日望山晴，忽到山中眼自明。
鳥道漸非前度險，龍潭更比舊時清。
會心人遠空遺洞，識面僧來不記名。
莫謂中丞喜忘世，前途風浪苦難行。
山寺從來十九秋，舊僧零落老比丘。

簷松盡長青冥幹，瀑水猶懸翠壁流。
人住層崖嫌洞淺，鳥鳴春間覺山幽。
年來別有閑尋意，不似當時孟浪遊。

(全書卷二十、外集二、江西詩內)

遊九華

九華原亦是移文，錯恠山頭日日雲。
乘興未甘回俗駕，初心終不負靈均。
紫芝香煖春堪茹，青竹泉高晚更分。
幽夢已分塵土累，清猿正好月中聞。

(全書卷二十、外集二、江西詩內)

將遊九華，移舟宿寺二首

逢山未愜意，落日更移船。峽寺綠深
逕，雲林帶石泉。鐘聲先度嶺，月色
已浮川。今夜巖房宿，寒燈不待懸。

其二

維舟谷口傍煙霏，共說前岡石徑微。
竹杖穿雲尋寺去，藤筐採藥帶花歸。
諸生晚佩聯芳杜，野老春霞綴納衣。

風詠不須沂水上，碧山明月更清輝。

（全書卷二十，外集二，江西詩內）

江上望九華不見

五旬三過去九華，一度陰寒一度雨，
此來天色稍晴明，忽復昏霾起亭午，
平生山水最多緣，獨此相逢容有數，
人言此山天所祕，山下居人不常睹，
蓬萊涉海或可求，瓠水崑崙俱舊遊，
洞庭何止吞八九，五嶽曾向囊中收，
不信開雲掃六合，手執赤日照九州，
駕風騎氣覽八極，視此瑣屑真浮漚。

（全書卷二十，外集二，江西詩內）

遊九華道中

微雨山路滑，山行入輕舟，桃花夾岸
迷遠近，迴巒疊嶂盤深幽，奇峯應接
勞回首，瞻之在前忽在後，不道舟行
轉屈曲，但恠青山亦奔走，薄午雨霽
雲亦開，青鞋布襪無塵埃，梅蹊柳徑

度村落，長松白石穿林隈，始攀風磴
出木杪，更俯懸崖聽瀑雷，亂山高頂
藏平野，茅屋高低自成社，此中那得
有人家，恐是當年避秦者，西巖日色
漸欲下，且向前林秣吾馬，世途濁隘
不可居，吾將此地營蘭若。

（全書卷二十，外集二，江西詩內）

重遊無相寺次韻四首

遊興殊未盡，塵寰不可留，山青只依
舊，白盡世間頭。

其二

人迹不到地，芟茨亦數間，借問此何
處，云是九華山。

其三

拔地千峯起，芙蓉插曉寒，當年看不
足，今日復來看。

其四

瀑流懸絕壁，峯月上寒空，鳥鳴蒼磧

底、僧住白雲中。

(全書卷二十、外集二、江西詩內)

山僧

巖下蕭然老病僧、曾求佛法禮南能、
論詩自許親三昧、入聖無梯出小乘、
高閣松風飄夜磬、石床花雨落寒燈、
更深月出山牕曙、漱齒焚香誦楞。

(全書卷二十、外集二、江西詩內)

此の山僧の詩は多分に佛教的用語を採
用し就中「禮南能」(南能は六祖慧能)
に徴して蓋し陽明は六祖壇經を愛誦し
六祖慧能の南頓的禪風に心酔し陳建も
陽明一生講學是尊信達磨慧能。

(學部通辨、續下五丁、和刻本)

赴南昌 正月
末日?

と説示する如く顯著に其の影響を受く
武宗命じて南昌に還らしむ。

途次江西廬山の(開先?)開元兩刹に遊
び白鹿洞にも赴く。

遊廬山開元寺

僻性尋常慣受猜、看山又是百忙來、
北風留客非無意、南寺逢僧即未回、
白日高峯開雨雪、青天飛瀑湧雲雷、
緣溪踏得支筇地、修竹長松覆石臺。
(全書卷二十、外集二、江西詩內)

白鹿洞獨對亭

五老隔青冥、尋常不易見、我來騎白
鹿、凌空陟飛嶺、長風捲浮雲、褰帷
始窺面、一笑仍舊顏、媿我髮先變、
我來爾爲主、乾坤亦郵傳、海燈照孤
月、靜對有餘谷、彭蠡浮一觸、賓主
聊酬勸、悠悠萬古心、默契可無辨。

(同上)

如九江 二月
上旬?

車駕未還なりしため、憂懼心痛して兵
を江西、九江に關す。

遊廬山 二月
中旬?

再び廬山に赴き東林、天池、開先、開
元、諸刹に遊ぶ。

廬山東林寺次韻

東林日暮更登山、峯頂高僧有蘭若、
雲蘿磴道石參差、水聲深澗樹高下、
遠公學佛却援儒、淵明嗜酒不入社、
我亦愛山仍戀官、同是乾坤避人者、
我歌白雲聽者寡、山自點頭泉自瀉、
月明壑底忽驚雷、夜半天風屋吹瓦。
(全書卷二十、外集二、江西詩內)

又次邵二泉韻

昨遊開元殊草草、今日東林遊始好、
手持蒼竹撥層雲、直上青天招五老、
萬壑笙竽松籟哀、千峯晻映芙蓉開、
坐俯西巖窺落日、風吹孤月江東來、
莫向人間空白首、富貴何如一杯酒、
種蓮栽菊兩荒涼、惠遠陶潛骨何朽、
乘風我欲還金庭、三州弱水連沙汀、
他年海上望廬頂、烟際浮萍一點青。

(同上)

登蓮花峯

蓮花頂上老僧居、腳踏蓮花不染泥、
夜半花心吐明月、一顆懸空黍米珠。

(同上)

夜宿天池、月下聞雷、次早知山下
大雨三首

昨夜月明峯頂宿、隱隱雷聲在山麓、
曉來却問山下人、風雨三更捲茅屋、
野人權作青山主、風景朝昏頗裁取、
巖傍日脚半溪雲、山下雷聲一村雨、
天池之水近無主、木魅山妖競偷取、
公然又盜山頭雲、去向人間作風雨。

(同上)

重遊開元寺戲題壁

中丞不解了公事、到處看山復尋寺、
尙爲妻孥守俸錢、至今未得休官去、
三月開花兩度來、寺僧倦客門未開、
山靈似嫌俗士駕、溪風攔路吹人回、

君不見富貴中人如中酒、折腰解醒須
五斗、未妨適意山水間、浮名于我亦
何有。

(同上)

遊廬山開元寺

清晨入谷到斜暉、徧歷青霞躡紫雲、
闔遠從雙劍闢、銀河真自九天分、
驅馳此日原非暇、夢想當年亦自勤、
斷擬罷官來駐此、不教林鶴更移文。

(同上)

又、廬山の近隣の落星寺(鄱陽湖の北)
にも訪歴せしならん。

遊落星寺

女媧煉石補天漏、璇璣晝夜無停走、
自從墮却玉衡星、至今七政迷前後、
渾儀晝夜徒揣摩、敬授人時亦何有、
玉衡墮却此湖中、眼前誰是補天手。

(同上)

歷南昌 二月
下旬?

南昌に歸者。

在南昌 三月

江西の租税を寛にせんことを上奏す。
上奏して故祖母岑氏を弔慕せんことを
乞ひしも允されず。

四月

在南昌、

五月
十五日

江西に大洪水あり上疏して彈劾す。之
君心の開悟して意を庶民に垂れん事を
希ひしなり。

如贛州 六月初旬

贛州に赴く。

自章口 六月初旬

章口より玉筍に入る。

至雲儲 六月十五日

雲儲に至りて宿す。

至吉安 六月十八日

吉安を過ぐ。

遊青原山 六月中旬

青原山(江西、吉安、吉州)の靜居寺に
遊ぶ。

青原山次黃山谷韻

咨觀歷州郡、驅馳倦風埃、名山特乘
暇、林壑盤紜迴雲石緣欹逕、夏木深
層隈、仰窮嵐霏際、始覩臺殿開、衣
傳西竺舊、構遺唐宋材、風松溪溜急

湍響空山哀、妙香隱玄洞、僧屋懸穹
崖、扳依儼龍象、陟降臨緯階、飛泉

至贛州
六月
下旬？

學者用功の方法を指示すること切なり
贛州に至り士卒を閲し戰法を教ふ。此

瀉靈寶、曲檻連雲橫、我來慨遺迹、
勝事多湮埋、邈矣西方教、流傳遍中
垓、如何皇極化、反使吾人猜、剝陽
幸未絕、生意存枯荄、傷心眼底事、
莫負生前盃、煙霞有本性、山水乞歸
骸、崎嶇羊腸坂、車輪幾傾催、蕭散
槩龔伴、澗谷終追陪、恬愉返眞澹、
寂辭喧騰、至樂發天籟、絲竹謝淫
哇、千古自同調、豈必時代偕、珍重
二三子、茲遊非偶來、且從山叟宿、
勿受役夫催、東峯上烟月、夜景方徘徊。

(全書卷二十、外集二、江西詩內)

過泰和
六
中旬？

廬陵の南方泰和縣を過ぎし時少宰羅整

庵、書を送り來りて學を問ふ。此の書
「傳習錄」卷二所收にして格物を謂ひ

の時、宦者江彬人を使はして動靜を窺
見せしめしかば、諸生及び陳九川等戒
諭せしも、毫も疑懼せず却つて「啾々
吟」を作りて之を解く。即ち其の詩に
曰く。

啾々吟

知者不惑仁不憂、君胡戚戚眉雙愁、
信步行來皆坦道、憑天判下非人謀、
用之則行舍即休、此身浩蕩浮虛舟、
丈夫落落掀天地、豈顧束縛如窮囚、
千金之珠彈鳥雀、掘土何煩用鋤鋤、
君不見東家老翁防虎患、虎夜入室啣
其頭、西家兒童不識虎、執竿驅虎如
驅牛、痴人懲噎遂廢食、愚者畏溺先
自投、人生達命自灑落、憂讒避毀徒
啾啾。

(全書卷二十、外集二、江西詩內)

此の「歌々吟」は已掲の「泛海」と共に就中有名なる物にして、實に洒脫豪放雄大、何等技巧を弄する所無く意念の儘に敘べ、逍遙無碍なる陽明の心境を表しその「信步行來皆坦道」「用之則行舍即休、此身浩蕩浮虛舟」「人生達命自灑落」の諸句及び「泛海」の「何異浮雲過太空」「月明飛錫下天風」の句は悟徹せる禪僧の境涯そのものなり。

六月 廬陵の劉養正の母を葬り文を爲りて以て之を祭る。

在贛州 七月

武宗帝尙も南都に在り、許泰江彬の姦黨自ら俘を獻じ功を奪はんとせしが、張永聽かず乃ち命を下し重ねて捷音を上らしめしかば始めて車駕北還の議起る。

八月 刑部院に咨ひ正憲の師、冀元享の冤罪

を雪がんとす。後獄中に卒せしかば之を慟哭し文を作りて恤れむ。

閏八月二十日

四度上疏して故祖母岑氏の墓を弔せんことを請ひしも允されず。

自六月間至八月間

國學基本叢書本全書卷二十、外集二、(二二五頁)に「再遊延壽寺次舊韻」の詩題あるを見て之を按ずるに在贛當時(四十九歲自六月至八月間)廣東韶州に赴き韶州の延壽寺に一度遊訪せしならん。

歸南昌 九月

再び南昌に還る。

武宗の大駕尙未だ北京に還幸せざりしため百姓嗷々たり。乃ち南昌の工役を興し、各道院に檄し、宸濠の廢地を取り、殖産貿易を奨勵し、以て饑を濟ひ税に代ひしかば稍々回復せり。

秦州の王心齋、門生の禮を執る。心齋

は王龍溪と共に王門の二大龍象と稱謂され、兩子に依りて王學天下に盛行せしなり。兩子は益々佛教の秘を啓きて之を師に歸し、陽明を援けて禪に入れしもので、蓋し陽明の禪的思想は亦一面兩子の啓發に負ふ所鮮少なからざるなり。心齋の格物説は之を淮南格物説と稱呼す。陳九川等日に講席に待りて宛然洙泗杏壇の風ありと稱せられ、聽講の盛況又察するに餘あり。

十一月

武宗の駕、南京を發す。

十二月
十日

車駕北京に還幸し、陽明始めて愁眉を開く。

正徳十四年(四十八歳)と十五年(四十九歳)との該二年間は文武二途に於て畢生の大功を立てしなり。

此の歳春日、齊山寺(所在不詳)に遊びしならん。

〇〇〇 春

春日遊齊山寺、用杜牧之韻二首

即看花發又花飛、空向花前嘆式微、
自笑半生行脚過、何人未老乞身歸、
江頭鼓角翻春浪、雲外旌旗閃落暉、
羨殺山中麋鹿伴、千金難買芰荷衣。
倦鳥投枝已亂飛、林間暝色漸霏微、
春山日暮成孤坐、遊子天涯正憶歸、
古洞濕雲含宿雨、碧溪明月弄清暉、
桃花不管人間事、只笑山人未拂衣。

(全書卷二十、外集二、江西詩內)

(四十一歳より四十九歳迄の巡歴は「陽明巡歴略圖」三及び一参照)

五十歳 正徳十六年辛巳、皇紀二一八一、西紀一五二

此の歳始めて陽明學の眞髓たる致良知の教旨を掲ぐ。陽明の所謂良知は禪の自性、妙心、本心に當り致良知は禪の

見性、現前本來面目の旨に當る。蓋し王學の完成に畫龍點睛の手段を全うせしもの、此の良知なるを知るべし。此の致良知の提唱は陽明の教學三變遷の中、第三變期(南昌以來)に屬する物と謂ふべし。

居南昌 自正月
至四月

「陸象山文集」を刻し之が「序」を爲りて陸子の末裔を表彰す。

在廬山 五月

門生を白鹿洞(廬山)に集め専ら教示に力む。蓋し此の時も東林、天池、開先諸刹に遊訪せし物ならん。

湛甘泉は學庸測の一篇を、方叔賢は大學と尙書洪範論の一篇を各々寄せしに對し書を以て教諭す。

倫彥武に對して心の動靜を論ず。

六月

春、武宗、崩御して世宗即位し新政の初め、陽明の功勳を嘉して召用の勅命至る。

發南昌 六月
二十日

勅命により南昌を發す。

至錢塘 七月

途次錢塘に至りしが輔臣の阻抑に遭ふて上京果さず。南京兵部尙書に墜り始めて歸省を許される。門人陸元靜と神仙養生の旨を論ず。

至越 八月

歸餘姚 九月

餘姚に歸省して祖塋を弔ひ瑞雲樓を訪ふ。是より日に宗族親友と宴遊し到處に隨つて良知を教示す。後年陽明の年譜を撰著せし錢德洪は王正心を通じて贊を以て門生となる。夏淳の范引年等七十餘人來謁して良知の旨を聞く。

十二月

武功を以て新建伯に封ぜらる。

兩京兵部尙書を兼ね、機務に參贊せしむ。

十二月
十九日

勅使を以て龍山公を存問せしが適々海日翁の誕辰に當り宴方に酣なりき。

五十一歳 世宗嘉靖元年壬午、皇紀二一八二、西紀一五

二二

在越 正月 上疏して封爵を辭せしも允されず。

十二月 父龍山公七十有七歳を以て卒す。

二月 特旨を以て龍山公と祖父竹軒とに併せて新建伯を贈らる。

七月 再び上疏して封爵を辭せしも允されず。

有司は陽明の學術を異端なりとして禁遏論劾せしを以て陸澄は六辯を爲りて之を反駁せしが陽明之を止論す。

九月 龍山公を石泉山に葬る。

五十二歳 嘉靖二年癸未、皇紀二一八三、西紀一五二三
在越 二月 南宮の試験官王説を排斥駁論し、以て

朱説を援護擴張せしむ。

九月 龍山公を天柱峯の陽方に、鄭太夫人を除山に各々改葬せしむ。

至蕭山十一月 杭州の近くの蕭山に至り浮峯寺に宿し

て見素林公と共に時事の非なるを慨難せり。

再遊浮峯次韻

世載風塵始一回、登高心在力全衰、
偶懷勝事乘春到、況有良朋自遠來、
還指松蘿尋舊隱、撥開雲石翦蒿萊、
後期此別知何地、莫厭花前勸酒盃。
(全書卷二十、外集二、居越詩內)

夜宿浮峯次謙之韻

日日春山不厭尋、野情原自懶朝簪、
幾家茅屋山村靜、夾岸桃花溪水深、
石路草香隨鹿去、洞門蘿月聽猿吟、
禪堂坐久發清磬、却笑山僧亦有心。

(同上)

張元沖と儒佛道三教に就て論辯す。

五十三歳 嘉靖三年甲申、皇紀二一八四、西紀一五二四

國學基本叢書本、全書、卷三五、附錄

四、年譜附錄一、四八頁に

「先是師在越、四方同門來遊日衆、能仁

光相至大天妃各寺院居不能容、同門王

良何秦等乃謀建樓居齋舍于至大寺左、

以居來學、師沒後、同門相繼來居」

と記するを以て之を按するに陽明は五

十三歳前後在越中(自五十歳、正德十六年八月至五十六歳、嘉靖六)

年八月)能仁、光相、至大、天妃各佛剎

に於て門弟の講習と王學の提唱とに力

めしなり。

在越 正月

郡守南大吉、門生となり稽山書院を創建して陽明を聘し聽講する者三百餘人

主として大學の萬物二體の妙旨を發明

し致良知、止至善の功夫をなさしむ。

四月 父龍山公の忌服する。

八月 仲秋月明の夜、門弟を碧霞池の天泉橋

畔に集めて開宴し吟風弄月雅歌投壺の

遊をなす。

碧霞池夜坐

一雨秋涼入夜新、池邊孤月倍精神、

潛魚水底傳心訣、棲鳥枝頭說道眞、

莫謂天機非嗜欲、須知萬物は吾身、

無端禮樂紛紛議、誰與青天掃宿塵。

(全書卷二十、外集二、居越詩)

秋聲

秋來萬木發天聲、點瑟回琴日夜清、

絕調迴隨流水遠、餘音細入晚雲輕、

洗心眞已空千古、傾耳誰能辨九成、

徒使清風傳律呂、人間瓦缶正雷鳴。

(同上)

月夜二首(與諸生歌于天泉橋)

萬里中秋月正晴、四山雲靄忽然生、

須臾濁霧隨風散、依舊青天此月明、

肯信良知原不昧、從他外物豈能撓、

老夫今夜狂歌發、化作釣天滿太清。

處處中秋此月明、不知何處亦羣英、
須憐絕學經千載、莫負男兒過一生、
影響尙疑朱仲晦、支離羞作鄭康成、
鏗然含瑟春風裏、點也雖狂得我情。

(同上)

秋夜

春園花木始菲菲、又是高秋落葉稀、
天迴樓臺含氣象、月明星斗避光輝、
間來心地如空水、靜後天機見隱微、
深院寂寥羣動息、獨憐烏鵲繞枝飛。

(同上)

夜坐

獨坐秋庭月色新、乾坤何處更閑人、
高歌度與清風去、幽意自隨流水春、
千聖本無心外訣、六經須拂鏡中塵、
却憐擾擾周公夢、未及惺惺陋巷貧。

(同上)

舒柏に敬畏と灑落とに就て教諭す。

四月 諸氏を徐山の祖墓に耐葬す。後、張氏

劉侯に對して入山養靜の可否に就て説諭す。

德洪の父、心漁翁に聖學の學業に妨なきを論諭す。

十月 門生南大吉は陽明の論學書をとり復五

卷を増して越に於て傳習録を續刻す。

登秦望^{十一月}廿一日全書卷二十、外集二(國學基本叢書

本、一二七頁)に「嘉靖甲申冬二十一日、再登秦望、自弘治戊午登後二十七年矣云々」とあるを以て此の歲冬秦望に登りしならん。

五十四歲 嘉靖四年乙酉、皇紀二一八五、西紀一五二五
在越 正月 夫人諸氏卒す。

「稽山書院尊經閣記」(全書卷七、所收)を著作せり。之陽明の六經に對する意見親知するを得べし。

を繼室に親迎す。

或は又、良知と見聞とに就て説く。

六月 前年服、己に除くも起復の命なし、依

〔傳習錄〕卷中所收。〕

りて禮部尙書席書、特に論薦せしも容れられざりき。

八月

晩生聶豹に書を以て天地萬物一體と良知とに關して説示す。〔傳習錄〕卷中所收)

歸餘姚

九月

餘姚に歸省して詩社を餘姚の西方龍泉山中天閣に定め詩賦に興ぜり。

十一月

繼室張氏實子正億(初命名正聰)を生む。陽明初めて子を得しなり。

顧東橋に致知格物の旨を教示し、「拔本塞源論」(傳習錄中卷所收)を作り、その末に繼ぐに萬物一體の旨を説盡せり。

十二月

劉邦采、惜陰會を爲り、陽明之が爲めに「惜陰説」(全書卷七所收)を作る。之蓋し致良知に就て光陰を惜むべきを教示せしなり。

十月

門生陽明書院を越城に建立す。

五十五歲

嘉靖五年丙戌、皇紀二二八六、西紀一五二六

自五十歲正德十六年辛巳八月間 居越中諸生に教示せし詩は至五十六歲嘉靖六年丁亥八月

在越

三月

鄒守益に書を與へ(全書卷六所收)良知上より禮を論ず。

四月

南大吉に書を與へ(全書卷六所收)致

良知的功夫を説く。

歐陽德に書を以て講學と實務とに就て

詠良知四首示諸生

箇箇人心有仲尼、自將聞見苦遮迷、

而今指與真頭面，只是良知更莫疑。
問君何事日憧憧，煩惱場中錯用功。
莫道聖門無口訣，良知兩字是參同。
人人自有定盤針，萬化根緣總在心，
却笑從前顛倒見，枝枝葉葉外頭尋。
無聲無臭獨知時，此是乾坤萬有基，
拋却自家無盡藏，沿門持鉢效貧兒。
(全書卷二十、外集二、居越詩內)

示諸生三首

爾身各各自天真，不問求人更問人，
但致良知成德業，謾從故紙費精神，
乾坤是易原非畫，心性何形得有塵，
莫道先生學禪語，此言端的爲君陳。
人人有路透長安，坦坦平平一直看，
盡道聖賢須有秘，翻嫌易簡却求難，
只從孝弟爲堯舜，莫把辭章學柳韓，
不信自家原具足，請君隨事反身觀。
長安有路極分明，何事幽人曠不行，

遂使荊茅成間塞，儘教麋鹿自縱橫，
徒聞絕境勞懸想，指與迷途却浪驚，
冒險甘投蛇虺窟，顛崖墮壑竟亡生。

(同上)

答人問良知二首

良知却是獨知時，此知之外更無知，
誰人不有良知在，知得良知却是誰，
知得良知却是誰，自家痛癢自家知，
若將痛癢從人問，痛癢何須更問爲。

(同上)

答人問道

饑來喫飯倦來眠，只此修行玄更玄，
說與世人渾不信，却從身外覓神仙。

(同上)

別諸生

綿綿聖學已千年，兩字良知是口傳，
欲識渾淪無斧鑿，須從規矩出方圓，
不離日用常行內，直造先天未畫前，

握手臨岐更何語、殷懃莫媿別離經。

(同上)

五十六歲 嘉靖六年丁亥、皇紀二一八七、西紀一五二七
在越 正月 書を黃宗賢に與へて致良知的修養法を

勸説せり。(全書卷六所收)。

四月 鄒守益は文錄を安徽の廣徳に於て刻す

五月 都察院左都御史を兼て廣西の思(思恩)

田兩州の反賊征討を命ぜらる。

六月 上疏して辭退せしも允されず。

八月 將に廣に入らんとし「客坐私祝」(全書

卷二四所收)を爲りて子弟を戒む。

九日 師の所謂

無善無惡是心之體、有善有惡是意之

動、知善知惡是良知、爲善去惡是格

物。(全書卷三)

に就て錢緒山は之を是とし王龍溪は究

竟的話頭に非ずとして

若説心體は無善無惡、意亦是無善無惡的竟、知亦是無善無惡的知、物是无善無惡的物矣。(同上)

の四無説を唱へ互に天泉橋上に於て師弟攻究問答す。之天泉證道紀或は四言教と稱謂され、陽明學の要訣に就て説論せし物にして且、兩弟の思想も分明に窺知せらるゝ所で此の問答法は禪宗五祖弘忍門下の慧能(身是菩提樹、心如明鏡台、時々勤拂拭、莫使惹塵埃、「六祖壇經行由第二」)と神秀(菩提本無樹、明鏡亦非台、本來無一物、何處惹塵埃「同上」)と(弘忍、慧能、神秀の問答法は六祖壇經行由第一參照)のそれに類似し、且、思想的にも相通する物あるを見る。之等兩思想に關しては正法輪(八四九號)所載の拙論「王陽明の四言教と禪學思想」參照すべし。

發越 九月 日

思田討征のため越中を發す。

渡錢塘 九月 十一日

錢塘江を渡る。

過釣臺 九月 中旬?

吳の山月嚴及び釣臺を過ぐ。

過嚴灘 九月 中旬?

王龍溪、錢緒山の兩弟は陽明を歡送して嚴灘(浙江、嚴州)に至り龍溪は佛教の實相幻相の旨説を舉止して教示を懇請せしに陽明は

有心俱是實、無心俱是幻、無心俱是實、有心俱是幻、(國學基本叢書本全書卷三、三三頁)

とて説示せしなり。龍溪は師説の所謂「有心俱是實、無心俱是幻」は本體上に功夫を説き其の「無心俱是實、有心俱是幻」は功夫上に本體を説くとせし説に對し陽明之を首肯せしなり。かく高遠玄妙なる禪的思想を有する龍溪は端的に玄旨を省悟せしと雖も緒山は後數載にして本體即功夫、體用一源の妙旨

至衢州 九月 十三日

(赴開化)

衢州(西安)に至り諸生の親迎を受く。

(途次開化に赴き靈山寺を訪歴せしならん。)

過常山 九月 十五日

浙江の常山を過ぐ。

過廣信 九月 末日?

江西の廣信を過ぐ。途次、徐樾の單定を教諭す。

至南昌 十月 上旬?

南昌に至り土民の親迎を受く。南昌に

至りし翌日、孔子廟に謁し明倫堂に於て大學を講ず。

至吉安 十月
中旬?

それより吉安に至り螺川驛の舊游の諸生に迎へられ修養論を提唱せり。

過韶州十一月初?廣東の韶州を過ぐるの時、韶州の延壽寺及び雲門峯に遊びしならん。

再遊延壽寺次舊韻

曆曆溪山記舊踪、寺僧遙住翠微重、扁舟曾泛桃花入、岐路心多草樹封、谷口鳥聲兼伐木、石門烟火出深松、年來百好俱衰薄、獨有幽探興尙濃。

(全書卷二十、外集二、居越詩內)

過肇慶 十一月
十八日

廣東の肇慶を過ぎ茲にて書を德洪、汝中に寄與し併せて家族の事を懇囑す。

(全書卷六所收)

至梧州 十一月
二十日

廣西の梧州に至り施政府を開き方略を議す。

在梧州十二月

暫らく兩廣巡撫の兼務を命ぜられ上疏

して辭しも允されず。

五十七歲 嘉靖七年戊子、皇紀二一八八、西紀一五二八

在思田 二月 思田兩州の賊巢平定。

四月 都臺を田州に遷す事を議せしも果さず

思田に學校を興し育英に盡す。

五月 新民を愛撫す。

在南寧 六月 廣西の南寧に學校を興す。

赴八寨 七月 貴州の八寨及び斷藤峽の諸賊を掃蕩

す。上疏して思田兩州、八寨、及び斷

藤峽の經略を乞ふ。

在梧州 九月
八日

思田兩州反賊平定の功を賣し、馮恩は恩賜の賞品を資捧して鎮に至る。

九月 錢王兩子に書を與へて、學況及び家鄉

の消息を懇問す。

十月
十日

病重きを以て、上疏して賜暇を請ひしも允されず。

十月 一日梧州の伏波廟に謁す。

至増城 十月
中旬?

廣東の増城に至り、五世の祖、王綱の祠に謁し祀を奉ず。

又、心友、湛甘泉の廬を過ぐ。

題甘泉居

我見甘泉居、近連菊坡麓、十年勞夢思、今來快心目、徘徊欲移家、山南尚堪屋、渴飲甘泉泉、飢食菊坡菊、行看羅浮雲、此心聊復足。

(全書卷二十、外集二、居越詩內)

書泉翁壁

我祖死國事、肇煙在増城、荒祠幸新復、適來奉初蒸、亦有兄弟好、念言思一尋、蒼蒼兼叢色、宛隔環瀛深、

入門散圖史、想見抱膝吟、賢郎敬父執、童僕意相親、病軀不違宿、留詩慰殷勤、落落千百載、人生幾知音、道

通著形迹、期無負初心。(同上)

過梅嶺 十一月
廿五日

江西廣東省境大庾嶺の梅嶺を踰ゆ。

王陽明佛刹巡曆年譜會要(三)

至南安 十一月
廿六日

江西の南安に至り、同地の官吏たりし門生、周積が舟中に懇問す。

泊青龍舖 十一月
廿八日晚

青龍舖に碇泊。其の翌曉、一豎急變す。

卒南安 十一月
廿九日辰

周積が翌朝來侍せし時、徐に開眼して

「吾去矣」と告ぐ。周積、遺言を尋るに

「此心光明、亦復何言」と莞爾として答

へ、少頃の後遂に示寂せり。實に是、

世宗嘉靖七年十一月二十九日辰の刻に

して、我朝、後奈良帝享祿元年、足利

十二代將軍義晴の時代なりき。

(陽明の遊歴せし佛刹、名山、道觀に

關しては「陽明巡歴略圖」一、二、三

四、參照)。

(五十歳より五十七歳迄の巡歴は「陽

明巡歴略圖」四及び一參照)。

楓在南安 十二月
三日

南安の南基驛に於て門生張思聰、王大

用、劉邦采等祭を設け嚴肅に棺斂す。

發南安 十二月
四日

楓を輿して舟に上り、南安を發し贛州

(一九)

